

<学部アーカイブ>

## キャリアデザイン学部設立期を回顧する

---

### 巻頭言

法政大学キャリアデザイン学部は、文学部教育学科を母体にして2003年4月にスタートした。その数年前に設置準備委員会が設置されて、準備作業を経たのち、国際文化学部や人間環境学部が続いて11番目の学部となった。

翌年の2004年には、本学部の教員が協力して日本キャリアデザイン学会（初代会長清成忠男）を設立し、2005年には「大学院経営学研究科キャリアデザイン専攻」を発足（2013年に「キャリアデザイン学専攻科」として独立した）するなど、本学部の完成年度に向けて、学部の教学分野に関すること以外にも、多岐にわたる業務がほぼ同時に行われた。

今回は、本学部の設立期に汗馬の労をいとわず尽力した教授会メンバーの方々に、当時の様子や思い出について寄稿していただいた。

（金山 喜昭）

## キャリアデザイン学部に 「アート」が導入されるまで

キャリアデザイン学部 教授 荒川 裕子

学部創設から二年後、2005年4月に筆者は本学部に着任した。当時のカリキュラムでは専門演習（ゼミ）は三年次から開講となっていたため（現在は二年次の秋学期から）、着任と同時に一期生たちのゼミを担当することになった。キャリアデザイン学部という、当時は（そして今なお）他に類を見ない学部において、ゼミを通してどのように学生の専門性を深め、大学での学びの集大成である卒業論文へと結実させていくか——現在まで続く模索の日々が、このときから始まったといえるだろう。ちなみに、当時のシラバスの「授業の目的及び概要」欄に、筆者は以下のように記している。「芸術（アート）のさまざまな位相を理解し、社会とアートの有機的な関りについて探求します。アートとは何か、アートと社会はどのようにつながっているのか、アートに関わる仕事にはどのようなものがあるのか、アートを人生に活かすにはどうしたらよいのか、といったことを、演習を通じて考えていきます（以下略）」。

\*            \*            \*

いささか個人的なことからではあるが、前任校もやはり、2000年に新設されたばかりの大学で、筆者が所属していた文化政策学部は、当時（そしておそらく今なお）日本でただひとつの学部として大きく注目された。それぞれ中身や規模はかなり異なるとはいえ、前例のない新しいタイプの学部の草創期に二度までも連続して立ち会うことになったのは、単なる偶然とばかりはいえないだろう。それは、この少し前ごろから、従来の学問領域の区分や大学での学びのあり方をめぐって、さまざまな問い直しが行われるようになっていたこととも無関係ではないだろう。

そうした時代の変化の一端を、筆者はまず前任校で身をもって体験した。そこでの筆者の担当は、もともと自らの専門分野である「(西洋)美術史」であった。古今の美術のありようを研究対象とする「美術史(学)」が学問として成立したの

は、(いろいろな解釈はあるが)少なくとも十八世紀、啓蒙主義の時代のドイツに遡る。以来、方法論や対象領域は多様化していったが、今日に至るまで確固たる学問分野として継承されている。この、三百年近くにおよぶ伝統をもつ「美術史」を授業で得々と講じる筆者の周囲では、しかしながらまったく異なる研究や教育活動が展開されていたのである。それはひとことで表せば「アート・マネジメント」であった。

アート・マネジメントとは何かを論じる場ではないため、ここではひとまず辞書の助けを借りて、「芸術作品を生み出すアーティストとそれを享受する観客との間を仲介し、社会のなかで作品の発信や受容がスムーズに行われるためのシステムを構築するさまざまな業務の総称」(日本大百科全書)と定義しておこう。芸術は長らく、個人の趣味の範囲で扱われるべきものであるとか、生活に余裕のある人びとにのみ許された文化的贅沢であると見なされがちであった(現在でもそのような認識が完全に払拭されたわけではない)。だが1990年代に入るところから、芸術が具えている自由でクリエイティヴな発想や表現を、まちづくりや観光、教育や福祉、新たな産業の創出など、社会のさまざまな現場において広く活用していこうとする動きが活発になってきた。そうしたなかで、芸術と社会、芸術と地域、芸術と市民をつなぐ役割を果たすものとして、「アート・マネジメント」という考えが注目されるようになったのである。

もともと、前任校に着任した当初、筆者にはアート・マネジメントに関する知識はほとんどなかったといってよい。実のところ、いまだ十分に浸透しているとはいいがたかったこの言葉に対しては、懐疑の念すら抱いていたように思う。だが、すでにこの領域で活躍していた同僚の教員たちと日々接するうちに、自身の認識は大きく変わっていった。音楽や演劇、現代アートなど、多様な芸術をいわば「ツール」として、地域活性化や世代間交流、在日外国人との共生といった、社会のさまざまな課題に取り組んでいくアート・マネジメントは、芸術とは美術館や劇場のなかに存在するものと単純に考えていた筆者にとって、とてつもなく大きな衝撃であった。いささか大げさにいえば、神棚に祀られていた芸術が、そこから降りてきて現実の社会のなかで呼吸しはじめたような感覚をおぼえたのである。

アート・マネジメントに対する社会の関心の高まりと呼応して、1990年代以

降、たとえば文化経済学会（1992年設立）や日本アートマネジメント学会（1998年設立）、日本文化政策学会（2007年設立）など、関連する学会が次々に誕生していった。芸術文化を支援することの社会的意義は企業のあいだでも共有され、1990年には「企業メセナ協議会」も創設されている。こうした一連の動きを国の立場から公的に裏打ちするものとして、2001年には、「文化芸術の振興についての基本理念を明らかにしてその方向を示し、文化芸術の振興に関する施策を総合的に推進する」ために、「文化芸術振興基本法」（法改正により2017年からは「文化芸術基本法」）が制定された。

このように、アート・マネジメントを取り巻く環境が急速に変化していき、それと並行して、アート・マネジメントを活用した事例やその効果検証、今後の展望などをめぐる言説が日々蓄積されていくのを目の当たりにしたことは、まさにひとつの新しい領域が生まれ育っていくプロセスを目撃するのに等しかった。西洋に起源をもつ伝統的な学問分野を専攻し、常に先達のあとを追うかたちで研究を進めてきた筆者にとって、それはこのうえなく新鮮でわくわくするような体験であった。芸術の新たな可能性に対する期待や好奇心に衝き動かされ、この領域についてもっと理解を深めたいという思いから、関連する書籍や論文を読み漁ったり、さまざまなシンポジウムに参加するようになった。すでにアート・マネジメントの最前線で活動していたまわりの教員たちは、（おそらくご本人たちはそうとは知らなかったろうが）筆者にとって最良の師であった。

自分なりに勉強していくうちに、芸術（このころから次第に「アート」と表記されるが増えていった）には関心があるけれども、「美術史」や「美学」といった特定の（伝統的な）分野を学究的に突きつめたいわけでは必ずしもない大多数の学生たちにとって、社会のなかでアートを活かす方法を実践的に探っていくアート・マネジメントは、より現実的かつ有意義な学びの題材ではないかと感じるようになった。と同時に、自分の授業でも扱ってみたいという思いがわいてきた。そのような折も折、縁あって法政大学キャリアデザイン学部に移ることになったのである。

\*                    \*                    \*

本学部では、「キャリア」という言葉を、（通常用いられるような）職業に関わ

ることがただけでなく、「学ぶ」「働く」「生きる」という、人が生涯を通じて積み重ねていく経験の総体を指すものにとらえている。そのような「キャリア」のなかにアートをどのように落とし込んでいくかを考えたとき、アート・マネジメントの観点、すなわち「アートと社会、アートと地域、アートと市民をつなぐ」というスタンスを導入するのは非常に有効であると思われた。良い意味で輪郭が曖昧なアート・マネジメントにおいては、アートのかたちが多様であるように、その手法も実にさまざまである。「マネジメント」という点では、それは（本学部を構成する三つの領域のひとつである）経営学（「ビジネスキャリア」）と多くの共通点をもつし、「人（の感性）を育てる」という側面に注目すれば、（本学部のもうひとつの領域である）教育学（「発達・教育キャリア」）にも接近しうる（ちなみに筆者は、三つ目の領域「ライフキャリア」[当初は「文化・コミュニティ」という名称であった]に属している）。要するに、キャリアデザイン学部という学際的な学部の特色や強みを活かせると期待したのである。

そのような筆者の思惑を、果たして学生たちはどのように受けとめたのだろうか。ゼミでは代々卒業論文集をまとめてきたが、その最初の巻の前書きで、筆者はゼミ生たちの様子を次のように紹介している。

ゼミ生たちの関心領域は多岐にわたっている。音楽や写真の制作に携わっている者は、自らの人生においてかけがえのないものとしてアートと向き合っている。あるいはまた、自らの出身地における文化環境の分析を通じて、アートをを用いた地域活性化の可能性を探求する者もいる。企業やNPOなど、アート支援を担う主体の多様化に注目する学生もいる。さらには、絵画や彫刻、演劇や音楽といった従来のアートの枠を超えて、電子メディア、食玩、ファッションといった新しいアートのあり方について考察する者もいる。  
(以下略)

アートに正解がないのと同様、アート・マネジメントにも定まったゴールというようなものはない。願わくは、これからも学生たち一人ひとりが、自分なりの関心や問題意識をもってアートにアプローチし、自他のキャリア形成にアートの豊饒な世界を活かしてほしいと考えている。

## 初年度の基礎ゼミとその後

キャリアデザイン学部 教授 上西 充子

私は学部が創設された2003年4月に着任した。ここでは学部設立当初の1年次の基礎ゼミの様子とその後の変遷に触れたい。

2003年度の基礎ゼミは春・秋連続の1年間の授業で、必修ではなく選択科目であった。定員は1クラス20名で、実際の私のクラスの受講生は社会人学生を含め14名。同年度のシラバスに私はねらいを次のように記している。

基礎ゼミは文献や資料を収集し、整理・分析し、レポートの形にまとめ、また人前で発表し、議論する基礎スキルを磨くことを目的としている。前期はまず「読む」「調べる」「書く」「発表する」という基礎を実践的に学ぶ。後期は前期の成果を前提として、各自で主題を設定し、文献や資料を収集し、中間発表・討議を経て4,000字程度のレポートを作成し、発表する。前期、後期を通じて、主要な話題は「職業と働きかた・暮らしかた」とする。なお、定員は20名とし、希望者多数の場合は初回に選考を行う。

春学期の授業では木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま学芸文庫）を基本文献として、事実と意見の違いの理解、自分の意見と取り上げた文献の著者の意見の書き分け、出典の確認、事実を踏まえた説得力のある論述、簡潔で読者を意識した論述などを、課題を出して翌週にフィードバックし相互検討することを繰り返しながら習得していった。

自分が読んだ本の内容を他の受講生に関心を持ってもらえるように工夫して紹介する課題などと共に、やや難易度の高い課題として取り組んだのが、国民年金の第三号被保険者制度を説明する課題である。年金制度そのものに馴染みがない学生たちが、制度をみずから調べて理解した上で、その制度に馴染みがない他クラスの同級生に向けてわかりやすく説明するという想定でレポート執筆を求めた。

私は前職が厚生労働省所轄の調査研究機関である日本労働研究機構（現：労働政策研究・研修機構）の研究員であり、労働問題に関わるアンケート調査やイン

タビュー調査の実施・分析・報告書執筆に携わってきたが、それに加えてよい経験となったのが日本の労働に関わるトピックを海外の読者に向けて紹介する記事の日本語原稿の執筆であった。例えば大卒就職率の推移を説明するときにも、日本の読者向けとは違う配慮が必要になる。そもそも就職希望者のほとんどが在学中に就職活動を行い、卒業までには就職を決めるのが通常であるという日本の新規学卒就職のしくみが海外から見れば特殊であり、その説明を欠かすことはできない。

そのように、どのような読者に向けて何をどう順序だてて説明するか、という配慮や工夫が、読まれる文章を書く際には必要であることを、第三号被保険者制度に関するレポート執筆で実感してもらいたかったのである。このような力は就職活動でみずからの経験を語る際にも、また仕事で外部の関係者や顧客と接するときにも、必要になってくる能力だ。選択科目であるこの基礎ゼミをみずから選んで受講した学生の皆さんは、課題が多いこの授業の要請によく応えてくれた。

その後、基礎ゼミは半期ごとに基礎ゼミ A・基礎ゼミ B と分けられ、基礎ゼミ A ではレポートの書き方などアカデミック・スキルの習得を中心とし、基礎ゼミ B ではグループで個人のキャリアヒストリーを聞き取り、発表するという内容に変わる。その背景には新入生合宿の簡素化から廃止へ、という流れもあった。

学部設立当初は主体的な学生生活を送るスタートとして2泊3日で新入生合宿が実施されていた。工場見学や職業人講話など、社会に触れる機会になるとともに、レクリエーションの時間も設けて新入生が相互に知り合う機会ともしており、また、みずから選んだワークショップに参加して、グループワークに積極的に参加してみる機会でもあった。宿泊に伴う安全管理の課題などから同イベントは合宿からキャンパス内での実施となり、その後イベント自体をなくし、新入生の大学生活へのオリエンテーション機能やグループワークの体験機会も基礎ゼミに吸収されることとなった。

さらにカリキュラム改革を経て、現在の基礎ゼミは春学期のみの必修授業（1クラス 20 名程度）となっており、1 年次秋学期にはキャリア研究調査法入門が必修科目として設置され、2 年次春学期にはそのうえでさらに詳しく調査法を学ぶ科目として、キャリア研究調査法（質的調査）およびキャリア研究調査法（量的調査）が選択必修科目として設けられている。

このように調査法に関わる科目は充実が図られてきたのだが、現在の基礎ゼミは半期 14 回でアカデミック・スキルの基礎をしっかりと身に着けるにはやや時間が足りないというのが正直なところだ。新聞や論説的な文章を読む習慣があまりなく、社会的な問題にもなかなか目を向けるに至っていない学生たちが、事実を踏まえた論理的な文章を書きあげることには、彼ら自身が困難を感じている。だからこそ丁寧に指導したいという気持ちはあるのだが、時間が足りない。また、ネットの関連文献の論理を借りたり、あるいは ChatGPT の助けを借りたりして、それらしい文章を書く器用さを身に着けている学生も多いため、みずから文章を書く力を身に着けたいという動機の点でも課題がある。質保証のために必修にしているわけだが、必修であるがゆえに学習意欲にはばらつきがあるということが難しい。

今は学部としては、書く力は基礎ゼミで基礎を身に着けたうえで、各ゼミで卒論執筆に向けて時間をかけて習得していくものと位置づけられている。ゼミも卒論執筆も当初から必修ではなく選択であり、しかし多くの学生がゼミに参加し、卒論執筆に取り組んできた。当初は 3 年次・4 年次がゼミの開講年次であったが、就活との兼ね合いもあり現在は 2 年次秋学期から 2 年半かけてゼミが開講されている。

1 年次の基礎ゼミのあり方と 2 年次秋学期からのゼミのあり方、それぞれをどう位置づければ学生にとって納得のいく学びにつながり、書く力にも自信をつけられるのか。まだまだ私自身も模索が続いている。

## 大学という場で、地域と研究と教育をつむぐ キャリアデザイン学部設立の頃の思い出

梅崎 修

私にとってキャリアデザイン学部での仕事始めは、2003 年 4 月、キャリアデザイン学部誕生の少し前になる。

キャリアデザイン学部設立の前年度、私は、政策研究大学院大学の任期付き研

究員としてオーラルヒストリー・プロジェクトの仕事に従事していた。毎日のインタビュー調査は楽しかったが、「任期付き」という先の見えない雇用であったので、次年度からの就職が決まった時は、安心と喜びを同時に感じた。面接終了後、ボアソナータワーを眺めながら新天地の夢を膨らませたことを覚えている。

採用が決まった後、怒涛のスケジュールが待っていた。既存学部ではなく、新設学部就職するのである。学部長就任予定の笹川孝一教授を中心に4月に1年生を迎える準備を進められていた。

市ヶ谷キャンパスでの設立準備会議に、同じく新任予定の八幡成美氏や上西充子氏と一緒に参加した時には「これは大変なプロジェクトだ」と感じた。今まで日本になかった新しい学部を立ち上げるとは、新しい教育を立ち上げることを意味していた。私も、入学直後に行われる全1年生が参加する合宿の準備のため、学生の視察先を訪問したことを覚えている。

いざ、1期生が入学した後も、教授会では、経営学研究科キャリアデザイン学専攻（その後、キャリアデザイン研究科）の設立、日本キャリアデザイン学会の設立が議論されており、実際、学部設立2年後にはそれらはともに設立された。いま振り返ると、学部設立の4年後の1期生が卒業と同時に大学院も学会も設立するようなスケジュールでもよかったと思うのであるが、当時は、経営学部から移籍された川喜多喬教授の主導で様々な新規事業が生まれていた。忘れてはいけないのは、法政大学のキャリアセンターも2005年に就職部から「キャリアセンター」へと組織体制を改め、センター長として川喜多喬教授が就任している。つまり、2005年はターニングポイントで、それまで新設学部の新入生を受け入れつつ、新しい組織を立ち上げるという激動の数年であったのである。

当時の世の中の動きに目を転じれば、この時代のわれわれ教授会メンバーの気持ちはわかるかもしれない。90年代後半に学校を卒業した世代を前期就職氷河期、2000年代前半に卒業した世代を後期就職氷河期と考えれば、若者たちのキャリア展望は明るくなく、キャリア支援に対する潜在的な社会的要請の動きがあった。我々には、キャリアに関する教育・支援・研究を産み出さねばという気概があったのではないかと思う（20年以上も前のことなので、過去が美化されて、そう思いたいだけなのかもしれないが）。

私自身は、創立年度は1年生しかいない学部で、初めての大学教員として1年

生対象の授業の試行錯誤を戸惑いながら続けていた。正直、何度も冷や汗をかきながら教壇に立っていた。2年目には、副主任という重役を担当することになり、初めての学部運営にも参加することとなった。慣れない授業と初めての執行部経験に、「さて、何をすればよいのか」と何度も思考停止してしまったこともあった。

ようやく自分のやり方が見えてきたのは、2年目の最後、地元神楽坂と連携したシンポジウムの企画と運営を担当してからである。執行部時代に最も力を入れたイベントである。

「地域活動とキャリアデザイン——神楽坂で働く、生活する」と題したシンポジウムは、以下のような2部構成であった（役職は当時のもの）。第一部では、法政大学に移る前から続けてきたオーラル・ヒストリー研究とキャリア研究を繋げる試みとして企画し、佐野眞一氏と森まゆみ氏という作家の方々に登壇いただいた。第二部では、神楽坂の方々に登壇いただいた。シンポジウムとして新しい取り組みは、インタビューの映像作成を行った点である。地元神楽坂で地域雑誌を発行していた編集者の平松南氏と私、さらに同僚の小林ふみ子氏と一緒にインタビュー作品を作成し、シンポジウムの会場で上映した。

### **第一部 仕事の話聴く、街の記憶を記録する**

「人生を観て、聴く」 佐野眞一氏（ノンフィクション作家）

「地域の記憶を今に活かす」 森まゆみ氏（作家・地域雑誌「谷根千」編集者）

コーディネーター 児美川孝一郎（法政大学キャリアデザイン学部助教授）

### **第二部 神楽坂を語る**

神楽坂で働く人たち（映像上映）

料亭幸本、本書き旅館「和可菜」、助六（下駄・履き物）など

### **パネルディスカッション**

平松 南氏（「不二家」飯田橋店3代目店主、神楽坂まちの手帖発行人・編集長）

山下 修氏（「山下漆器店」2代目店主、神楽坂まちづくりの会会員）

石井要吉氏（「助六」3代目店主、神楽坂通り商店会副会長）

山本 歩氏（料亭「幸本」若女将）

司会 梅崎 修（法政大学キャリアデザイン学部講師）

コメンテーター

金山喜昭（法政大学キャリアデザイン学部助教授）

小林ふみ子（法政大学キャリアデザイン学部講師）

主 催

法政大学キャリアデザイン学部

共 催

法政大学地域研究センター

法政大学キャリアデザイン学会

後援・協力

法政大学エクステンション・カレッジ

季刊地域誌「神楽坂まちの手帖」

この設立2年目の3月で、私は悩んでいた研究方法、大学運営、教育を一つにつなぐヒントを得た。そして、3年目の4月からは、ゼミナールの1期生との活動がはじまった。つまり、このシンポジウムを梅崎ゼミによる神楽坂でのオーラル・ヒストリー調査に発展させることができたのである。1期生が4年生になる時には、オーラル・ヒストリーによる地域雑誌500部を刊行することができた。雑誌名は、神楽坂の象徴である「路地」とキャリアの頭文字である「c」を組み合わせ、『Roji (c)』（以下では、ロジック）とした。この雑誌のメイン・コンテンツは、ゼミ生一人ひとりが神楽坂で取材先を探し、人びとのキャリアヒストリーを聞き書きした記事である。その後7年もの間つづく、ゼミの独自運営の地域雑誌は初刷1000部までに増えた。雑誌の印刷費のために広告費を集め、地元のお祭りで販売するという長期プロジェクトとなった（詳しくは、梅崎・佐藤・寛（2015）や梅崎（2015））。全7号の刊行でインタビューをした神楽坂の人びとは全86名である。地域オーラル・ヒストリーとしては、前例が少ないプロジェクトになったと自負している。私は、この活動を通して地域を知り、大学を知り、教育

を知り、そして新しい研究テーマと出会ったのである。

人びとのキャリアを研究するならば、記憶の中にある経験を聞く必要がある。キャリアの想起はどのような条件で起こるのか、豊かな想起を促す聞き取りとは何かを問うことになった。そして、そのような調査を学生に向けてどのように教えればよいのかという教育上の問いも新しく生まれた。現在にも続く、研究と教育の試行錯誤が始まったのである。学部設立後の 4 年間、未完成の研究を通じた教育には不十分なところが多かったと思う。知的挑戦と言えれば聞こえはよいが、当時のゼミ生たちには無理な目標を掲げてきたと思う。この場を借りて卒業生たちに感謝を述べたい。

他方、研究にも教育にも完成はないとするならば、大学は、地域（≒研究対象）に足場を持ち、研究と教育の試行錯誤が続けられる場でなければならないと思っている。過去を振り返り、周りを見渡せば、新設の学際学部という場で、同僚たちもこのような試行錯誤を続けて来られたのだと思う。そういう姿に励まされる日々であった。

さて、この原稿を書いている 2023 年、これからもキャリアデザイン学部がそのような試行錯誤の場であり続けるために、私も、もうひと汗をかいて、もう一仕事しなければならぬと考えている。キャリアデザイン学部を回顧することが、新しい一歩となればと思っている。

## 参考文献

- 梅崎修 (2015) 「オーラル・ヒストリーを用いた大学の教育実践 (特集 オーラル・ヒストリーを用いた大学の教育実践)」『日本オーラル・ヒストリー研究』11 pp. 61-73
- 梅崎修・佐藤憲・笈隆太 (2015) 「オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性——大学生によるタウン誌作成の実践を通じて」『地域イノベーション』7 pp. 83-94

## キャリアデザイン学部設立期の思い出

法政大学キャリアデザイン学部 教授 金山 喜昭

2002年4月、私は学芸員養成課程を担当する助教授として文学部教育学科に着任した。教職資格課程には、教職課程と資格課程があり、後者は社会教育主事課程と図書館司書課程、そして学芸員課程の3課程からなる。

私は翌年4月に教育学科の他の教員とともに、新設されたキャリアデザイン学部に移籍した。本学部は、これまでの工業社会から知識社会に転換する時代にあたり、個人の自立を可能にさせるために、キャリア意識をもち主体的なキャリア形成のできる人材を育成することを目的に設立された。当時大学では、それまでの第一・二教養部を発展再編して新たな学部を設置する改革が清成忠男総長の下で行われ、1999年の国際文化学部、人間環境学部に続き、法政大学では11番目の学部として設立された。ここでは、学部の立ち上げから完成年度までに私が経験したことのうち、そのいくつか紹介したい。

キャリアデザイン学部の設置準備委員会は委員長の笹川孝一教授をはじめ、副委員長の川喜多喬教授、高野良一教授、児美川孝一郎助教授など10名余りの教授会メンバーからなり、毎回長時間にわたり白熱した議論が交わされた。着任したばかりの私は、委員会での議論の様子を見守るだけであった。委員長と副委員長がしばしば口論する場面もあったが、そこは児美川氏が調整役をこなし、アウトヘーベンして纏りあげて発展させていく。委員長は、私にしばしば自分はサンドバック役だと吐露されていたが、包容力のある面白い例えに感心したことを覚えている。もちろん副委員長にも悪気があるわけではなく、表裏のない、専門の経営学の観点や、それまでの経験などから独自の見解を披露されたわけである。言うなれば、この絶妙な取り合わせが基盤となり、教授会メンバーの総力により本学部がつくられたといえる。

当時、法政箱根荘で教員合宿が行われたのも、そのようなムードが追い風になったのだろう。合宿中は寸暇を惜しまずミーティングをする一方、夜は懇親会によって相互の親睦がはかられた。この教員合宿は、学部がスタートしてからも行われた。最初は合宿に抵抗感をもつ人もいたかもしれないが、学部開設年が決

められた中での準備作業であったことから、メンバーの熱意や責任感のようなものが轟々と感じられた。

私は、開設準備の一環としてシンポジウムを担当した。キャリアデザイン学部は、教育、ビジネス、生活文化の3領域からなることから、領域ごとにシンポジウムが行われた。パネリストの方々からは、学部理念に引き付けた、それぞれの分野から貴重な発言をいただいた。中でも、文科省審議官の寺脇研氏から寄せられた、「10年後にはこうした学部はなくなってほしい」、という発言は印象的であった。当時、若年者のモラトリアム化に対するキャリア開発が喫緊の課題となっていたことから、発言は学部を期待を寄せるエールを意味していた。シンポジウムに先立ち、文科省に笹川教授と依頼に行った際、窓口になった係長にキャリアデザイン学部の考え方を説明したところ、初等・中等教育でやらなければならないことを、大学が学部を新設して取り組むことに期待感が示されたことを記憶している。

また、松岡正剛氏（編集工学研究所長）と熊倉功夫氏（当時、国立民族学博物館教授）は、キャリア形成には文化力が不可欠の要素になることを力説された。設置時には、「文化」は個人が勤労観や職業観を身につける上で、教養としての文化を嗜むことは国際社会では当たり前であることが学部理念として意識されていたことから、両氏の発言はとても興味深いものであった。この頃には大学に茶室をつくろうという案もあったものの、事情は不明だが実現には至らなかった。

2003年4月に本学部がスタートすると、15名ほどの教員と学務課の職員によって教学上の様々な業務に取り組んでいった。中でも、学部独自の新入生合宿（2泊3日）は、新入生が高校時代から離脱して、キャリアデザイン学部の学生になることを相互に確認し合うために企画された。初年度は法政大学の石岡合宿所だったと思う。その後は埼玉県嵐山の国立婦人会館、富士山麓のホテルなどで毎年行われた。合宿では、様々な取り組みが行われたが、中でも樽職人の玉ノ井芳雄氏による実演は印象に残っている。玉ノ井氏とは前職の学芸員の頃からの知り合いであったことから、学生に職人の技を見せたいと相談したところ快く応じていただき実現することができた。長年お付き合いをしながらも案外と知らないこともあった。実演前に玉ノ井氏はカセットテープレコーダーを用意して、録音の準備をしながら、学生たちに後で聞き直して反省するのだと言われた。その真摯

な態度に恐縮した。醤油容器であった樽は時代の推移とともにその需要は減少し、かつて野田に100軒以上もあった樽屋はわずか2軒（2000年当時）になってしまった。しかし、玉ノ井氏が普通の職人と違うのは、樽づくりに拘り、販路を求めて土産用のワサビ容器を開発し、長野冬季オリンピックで玉ノ井氏が製作した樽太鼓が閉会式で演奏されたことが契機になり、小中学校の音楽の教材に樽太鼓が採用されるようになるなど、自己進化をはかっているところである。実演では、職人としてのキャリアを貫くためには、技を守る頑なさばかりでなく、時代の変化に適應する柔軟な発想をもつことが披露された。学生たちの反響は、「かっこいい」というものであった。

また、野田市で開催された日本キャリアデザイン学会の中間大会についても触れておきたい。当学会の設置準備の際に、地域の視点からもキャリアデザインにアプローチするために、自治体の首長に理事になってもらうことになった。私にその人選を託されたことから、信頼のおける地元の野田市長根本崇氏に就任を依頼したところ快諾を得ることができた。野田市は2009年9月に全国の自治体で初めて公契約条例を制定したが、それは根本氏の首長としての矜持を示すものといえる。

学会設立後の2005年6月に野田市役所で「まちづくりとキャリアデザイン」というテーマの中間大会が行われた。市民にも参加を呼び掛けたところ、来場者が200名ほどの盛況ぶりであった。茨城県自然博物館名誉館長の中川志郎氏（元上野動物園長）による講演「私のキャリアデザイン～動物園と自然博物館」では、中川氏が小学3年生の時に行ったドジョウの観察レポートを担当の先生から励まされたことが、動物学や動物園の途に進んだきっかけになったことが披露された。また、シンポジウムでは、行政、経済、学校教育、市民文化活動などの立場から意見が交わされ、行政、市民、企業などとの連携や、個人がリセットして「まちづくり」に参加することなどが展望された。このシンポジウムは、キャリアデザイン学会が地域に開かれた存在感を示す良い機会になったばかりでなく、私が地元野田市でNPO法人を立ち上げて、野田市郷土博物館の指定管理者になり、博物館を地域の連携の繋ぎ役とし、「市民のキャリアデザインの拠点」にすることに繋がった。それはゼミ生がNPOの事業スタッフとしてとして参加したり、「キャリアデザイン学入門D」の受講生（毎年150名以上）による野田市内（醤油産業

都市の遺産)や博物館の見学会を実施するなど、本学部生が「市民のキャリアデザイン」を学ぶ教育の場にも生かされた。

私にとって、学部の設立期に経験した諸々の事は、その後の教育・研究活動にとっての基礎づくりになったと思う。

## 回想のなかの学部設置の「あの頃」

児美川 孝一郎

「アイデンティティ」概念の提唱者として著名な E. H. エリクソンは、晩年の労作である『青年ルター』や『ガンディの真理』、さらには、アメリカ合衆国の第3代大統領ジェファーソンを研究対象とした『歴史のなかのアイデンティティ』において、変革期のただ中にある社会の変化のうねりと、疾風怒濤の個人の自己形成史が折り重なっていく様相を、独自のサイコヒストリーの手法を通じて見事に描きだした。「心理—社会的アイデンティティ」の理論的示唆さながらに、社会の構造的な変容が、個人のライフヒストリーを規定していく側面と、そうした社会的規定の影響を受けつつ、個人が自己認識を確かなものにしていく側面との相互作用を説得的に示したのである。

もちろん、宗教改革やインドの独立運動、アメリカ独立宣言の発出といった歴史的な大変革の時期に立ち会い、そうした歴史的・社会的変化のプロセスと、個人としての自己(アイデンティティ)形成史を重ねることができたような個人は、当然のことであるが、きわめて希有な存在である。言ってしまうえば、歴史の教科書に登場するような人物だけだ、ということになるかもしれない。

しかし、歴史の教科書に名を残すことなどなくとも、社会の変化と自己の成長・発達や変容の重なりを意識しながら生きた個人は、存在しないかと問えば、案外に少なくないはずである。ましてや、ここで言う社会を、大文字の「社会」ではなく、もっと身近な、自らが属している組織やコミュニティ等に置き換えてみれば、「ああ、自分もそうだ」と思う人が増えてくるのではなからうか。

エリクソンの潜みにならって言えば、人は、仮に無人島で暮らし、誰とも接す

ることがなくても、衣食住などの生命維持の環境さえ整っていれば、それで満足できるといった存在ではない。そうではなく、自らの存在証明（アイデンティティ）を求めざるをえない存在として生まれてくる。だから、他者とのかかわりや他者からの承認が必要となる。そして、だからこそ、歴史の教科書の登場人物などではなく、ごく普通の、市井の民であったとしても、その個人が属する組織やコミュニティの変化と、個人のキャリア形成上の変化が折り重なるようなケースが出てくるのであろう。

\*            \*            \*

こんなふう書き出してしまうと、まさに自業自得なのだが、臆病風が吹いてくる。自分自身のことを書くのには、相当な勇気が必要になってしまう。しかし、ここではあえて、学部創設の頃の僕自身について書いてみたい。それは、学部という「組織」のオフィシャルな証言ではなく、そこに参画した「個人」の側の肉声の証言を残しておきたい。そんなことにも少しは意味があるはずだという期待を込めて、である。

さて、2003年度に最初の入学生を迎え入れて開設されたキャリアデザイン学部については、2000年前後から、設置のための構想が議論され、それが固まると、文科省への認可申請を含む設置準備の作業が着々とすすめられていた。個人的には、この設置準備のプロセスに最初から参加していたので、この準備の3年間と、さらにその後、実際に学部が開設され、年次進行で在生が増えていき、最終的に卒業生を輩出していくまでの4年、5年が、僕自身にとっての学部設置の「あの頃」である。

そして、この「あの頃」は、傲慢であるとか、牽強付会であるとかといった批判や非難は覚悟のうえで言えば、社会の変化（少なくとも、教学改革に取り組もうとした法政大学の動き）と僕自身のキャリア形成上の転換点が、確かに折り重なるような時期であったと思っている。

2000年代の初め、日本社会では「キャリア」という概念に注目が集まりはじめ、「日本型雇用」の縮小・再編とも符丁を合わせながら、個人による自律的なキャリア形成の必要性が提唱されるようになった。厚生労働省の「キャリア・コンサルタント5万人養成計画」に象徴されるように、個人のキャリア形成の支援業務や

それを担う人材育成にも社会的な関心が高まった。法政大学が、日本で初めてのキャリアデザイン学部の創設に踏み切ったのは、そうした時代背景においてである。

他方で、僕は、1996年に法政大学の文学部教育学科に着任した。その時点では、学科の学生に対して教育学の科目を教え、市ヶ谷キャンパス全体の教職課程カリキュラムについても、それを担っていくことが、自分が将来全うすべき仕事であると純粹に思っていた。それは、教育学部を出て、大学院の教育学研究科を経由して大学教員になったような者であれば、誰もが描いたであろう自己のキャリアの将来像である。

しかし、実際に教育学科に着任するとすぐに、この将来像には暗雲が立ちこめはじめた。実は、文学部教育学科は、法政大学の戦前の高等師範部の歴史を継承し、戦後には、教員免許の書き換えを含めた現職教員に再教育の場としての役割を果たしてきた学科である。そのため、夜間（二部）の学生定員のみを有する学科であった。そうした二部のみの学科が、20世紀末を迎えて、ある意味での岐路に立たされていたことは間違いない。法政大学全体としても、他学部・他学科にも存在していた二部をどうするかということが、大学改革や教学改革のうえでの大きな課題となっていた。

そうした背景のなかで、まずは、文学部内での学科再編の試みが動き出した。さまざまな曲折があるが、このところの経緯については、この小論の主題ではないので触れない。結論的に言えば、文学部内での改革論議を通じて、教育学科の学科としての存続は危うくなり、さらに最終的には、教育学科の再編を含み込むかたちでの文学部の改革プランは頓挫した。その結果として、行き場を失ったかたちの教育学科（正確に言えば、教育学科の教育学コース）は、全学において立ち上げがめざされたキャリアデザイン学部の設置構想に新天地を求めることになったのである。

ここから、キャリアデザイン学部の設置に至るプロセスが開始されるが、わずか数年のこととはいえ、そこには、当初は「生涯教育（学習）学部」と銘打っていたような時点からの転換も含めて、かなりの紆余曲折がある。しかし、この点についても、別のところでさまざまな記録や証言等が提出されつつあるので、ここでは触れない。あくまで、僕個人がどう変化したのかについて書いておく。

\* \* \*

今でも時々、頭の隅をかすめることがある。4半世紀も前に法政大学に着任した僕が、仮に今でも、文学部教育学科にいたとしたら、きっとそこで自分がやっているであろう仕事や研究は、実際には、キャリアデザイン学部にも所属することになった今の僕がやっている仕事と研究とは、相当にかけ離れていたのではないかと。

どう考えても、環境は、人を変える。僕自身も、30代後半にこの学部の設置準備（その後は運営）にのめり込むことになって、自分自身が変わったという「自覚」がある。あけすけに言うてしまうが、新設学部の立ち上げという業務には、さまざまな、いや、さまざますぎる会議や打ち合わせ、書類作成等の実務に費やさなくてはいけない労力を限りなく必要とした。精神的にだけでなく、肉体的にも疲弊した。しかし、そうした「精神／肉体労働」と引き換えに、知的に刺激を受け、個人的にもわくわくするような経験を積み重ねることができたのも確かである。何より、すでにある組織やカリキュラムを前提にする必要がなく、ゼロ・ベースで、新学部のあり方や教育課程について議論し、構想し、それを実際の「かたち」に着地させていくという作業は、面白かったし、やりがいがあった。もちろん、すべてが自分の思いのままになるはずはなく、実際にできたものは「妥協の産物」ということになるのだが、しかし、大学教員のキャリアとして、こんな体験ができたのは、本当にラッキーなことだと思っている。

まあ、とにもかくにも、そうやってキャリアデザイン学部が立ち上がった。

新設されたキャリアデザイン学部のなかで、「揉みくちやにされて」とまでは言わないが、それなりのウェイトで「揉まれる」ことで、やはり僕の研究的な関心や仕事の内容は、少しずつ変化していった。

もともと、この学部は学際的な学部として構想され、設置時の同僚には、教育学以外に、経済学、経営学、会計学、心理学、社会学、歴史学、文学などを専門とする教員がいた。もちろん、教員間の関係だけであれば、最終的には「専門が違うので」と言えば、それで済んだ。だから、大きかったのは、授業である。学部設置の2年後には大学院を設置した（当初は、経営学研究科のキャリアデザイン学専攻）こともある。

学部の授業といえども、設置当初はかなりの数の社会人学生がいた。社会人の学生に対して、「専門は教育学なので」とは言えるけれども、しかし、教育学の視点からどうキャリアデザイン（学）に迫るのが、常に問われているように感じていた。大学院での講義や指導になれば、なおさらである。さらに付け加えると、学外のことではあるが、同じ時期に日本キャリアデザイン学会の立ち上げに参画したということの影響もある。

\*            \*            \*

学部ができて5年も経つと、自分でも自身の変化に気づかざるをえないようになった。キャリア教育を本格的な研究対象に据えはじめたということもあるが、このテーマじたいは、青年期教育に関心を寄せ、進路指導なども研究対象としていた以前からの延長上に位置づく。だから、変化したのは、研究テーマというよりは、そこに迫るための方法的視点であり、僕自身の「構え」である。

この頃、教育学系の学会大会に参加していて、その場の雰囲気にも馴染めないでいる自分を発見して驚いた記憶がある。かつては空気のように吸い込んでいたはずの「教育学くささ」（正確には説明しきれないが、規範や理想を求める傾向がどちらかと言えば、強く、「本来性の隠語」に包まれているようなイメージ）に、いつの間にか同調できなくなっていた。そのことが、僕にとって幸せなことだったのか、それとも逆なのかは、もちろんわからない。しかし、後戻りできないことだけはわかっている。そうであれば、教育学の内と外を行き来する「マージナル・マン」として、思いきり「越境学習」に励むのが、僕の務めなのかもしれないとも考えるようになった。

思い起こしてみれば、新入生合宿もやったし、履修相談からゼミ選択に至るまで、さまざまな学生によるピアサポート活動も仕込んだ。体験型の学習やフィールドワークも組んだし、卒業論文の発表会や優秀作品の表彰も実施した。キャリアアドバイザーも採用し、学部運営を議論するための教員合宿までやった。文科省の「現代GP」に採択された時には、さらに多忙になったが、それでも前向きに「耐えた」。そんなキャリアデザイン学部立ち上げの「あの頃」は、今となっては、しんどいという記憶よりは、懐かしさの感覚や感傷のほうが甦ってくる（気がする）。新しい学部ができるということは、それなりの「事件」なのだと思う

が、その事件が、僕自身のキャリア形成の転換点にもなったのだと考えると、ある意味、感慨もひとしおである。

## キャリアデザイン学部創設のころ

坂本 旬

キャリアデザイン学部が創設されたのは2003年4月である。この前年度、私は日本にはいなかった。2002年4月から翌年3月まで、在外研究でニューヨークに滞在していたのである。キャリアデザイン学部が創設するまでは文学部教育学科に所属していた。2部（夜間）だけの学科であり、新設される学部への編入について、さまざまな議論があった。その一つがキャリアデザイン学部の創設であった。しかし、文学部時代に決まった在外研修のため、創設直前の1年間の様子をほとんど知らない。

それだけではない。在外研修の前年である2001年9月11日、世界を揺るがす大事件が起きた。この日、私は自宅でテレビ朝日の報道番組「ニューステーション」を見ていた。突然入ってきた映像に息を呑んだ。ニューヨークのワールドトレードセンターにハイジャックされた2機の旅客機が突入したのである。高層ビルから真っ黒い煙が上がっていた。その後、2棟の高層ビルが崩壊した。

その日は、在外研修の準備のためにニューヨークに出かけ、帰国した1週間後のことだった。私はまさにその地に翌年から滞在しようとしていたのである。テロはワールドトレードセンターだけにとどまらず、他に1機がペンシルバニア州に墜落し、もう1機はワシントンDCの国防総省に突入した。そのため、この事件は「アメリカ同時多発テロ」と呼ばれるようになった。

果たして私は本当にニューヨークに行けるのだろうか。そう思わずにいられなかった。アメリカ全土のフライトが止まり、日本からアメリカに飛ぶフライトも止まってしまったからである。普通ならば、この時点で研修先を変更しただろう。予定が立たなくなってしまったからだ。しかし、結局、私は滞在予定先を変更しなかった。むしろテロ事件後のニューヨークに行きたいという思いが強くなった

のである。その後、アメリカはアフガニスタン、そして、イラク戦争へと突き進んだ。イスラム文化と西洋文化の亀裂は決定的なものとなり、それは今日も胸を痛めさせられる悲惨なガザの状況につながっている。明らかに「アメリカ同時多発テロ」は世界史を塗り替えてしまった。

このような経緯のため、私にとって、キャリアデザイン学部創設の記憶よりも、直前のニューヨークでの記憶の方が圧倒的に大きかった。こういう言い方もできるかもしれない。あくまでも個人的な感覚であるが、キャリアデザイン学部は世界史を変えた「アメリカ同時多発テロ」直後に開設された学部だと。実際のところ、このことについて今まで深く考えたことがない。たまたま、学部創設の頃の思い出を書く必要に迫られて、当時の思いを思い起こすことになったからである。

ニューヨークでの所属先はニューヨーク・シティカレッジ(CUNY)学校開発センターであった。CUNYは市内にいくつかのキャンパスがあるが、学校開発センターはハーレム地区にあった。学校開発センターは市内の公立小中学校の教員研修を行っており、私が滞在した頃は、「カルチャークエスト」(文化探究)と呼ばれるPCを用いた探究学習の研修を行っていた。私自身もこのプログラムに参加し、ハーレム地区の小学校や中学校を訪問した。他方、「911」以後のアメリカはもはや自由の国ではなかった。地下鉄の駅には、銃器を持った州兵が立ち、空には絶えず軍用ヘリが飛び回っていた。街のあちこちに「UNITED WE STAND」のスローガンや米国旗が掲げられた。外国人の自分でさえ、自由にモノが言える雰囲気ではなかった。さらには、中東系の住民が殺害される事件さえ起こっていた。

2003年3月には、アメリカが中心となった有志連合によるイラク戦争が始まった。研修を終えて帰国した直後、アメリカはバクダットを制圧する。アメリカは徹底した報道規制を行い、戦争プロパガンダを拡散する。住民がサダムフセイン像を引き倒した映像が世界中で報じされたが、米軍が仕組んだやらせだった。今でも忘れられないのは、米軍によるメディアへの攻撃であり、米軍の砲撃によってジャーナリストが殺害されている。たまたまその場に居合わせた日本のジャーナリストが伝えた映像が当時の戦争の現実の一端を示している。私はこの時の録

画ビデオを今でも授業に使っている。

私がメディアリテラシー研究に本格的に取り組むことになったのは、こうした経験が土台になっている。メディアは戦争の現実を報じない。市民生活の現実をお互いに知らず、プロパガンダに流され、怒りに駆り立てられた市民が戦争を支持し、何の罪のない数多くの人々が殺されたのである。これはまさにいま、ウクライナで、そしてガザで起こっている現実だ。

私がキャリアデザイン学部創設後、2005年に初めてのゼミ生を向かい入れた。ゼミ生にニューヨークでの経験を話し、ニューヨークに行きたいか尋ねた。当時の法政大学には、海外研修を行うゼミに10万円の助成を行う制度があり、私たちはこの助成を得ることができたのである。ニューヨークでは、学生がCUNYでプレゼンテーションを行い、ハーレム地区の小学校、中学校では文化探究授業を行った。2007年、雨のマンハッタンのファーストアベニューを埋め尽くした反戦デモに遭遇した。そして、ニューヨーク研修最後の2008年には、オバマの大統領当選で湧き上がるハーレムの夜を体験することとなった。2009年度以降はニューヨークからベトナムとカンボジアへと研修先を変えた。アメリカだけではなく、アジアの発展途上国に行きたかったからである。そして、佐藤一子教授の発案により、このプログラムはゼミだけではなく、海外フィールドワークを行う授業として位置付けることになった。

2010年7月の学務担当理事との折衝を皮切りに、国際交流委員会、学部長会議、理事会で決済され、10月には坂本ゼミの海外研修に相乗りする形で事前視察を実施した。そして翌2011年、「キャリア体験学習（国際）」が開始された。当初は、2012年度からの新カリキュラムでのSA導入、新設された授業「地域学習支援」の開始と合わせようとしたが、ベトナムのキャリア体験学習（国際）のみ1年先行して実施することになったのである。

ニューヨークでの体験が法政大学にもたらしたもう一つの影響はユネスコとの連携である。2007年、セントルイスで開催された全米メディアリテラシー教育学会に参加する。そこで知り合ったコロンビア大学の先生に誘われて翌年コロンビア大学を訪問し、国連でメディアリテラシー教育プログラムを立ち上げたばかり

のジョルディ・トレント氏を紹介される。このプログラムはその後、ユネスコの「メディア情報リテラシーと異文化間対話(MILID)」プログラムとなった。そして、2011年3月にトレント氏を法政大学に招いたシンポジウムを計画したが、東日本大震災のため、2012年に延期した。その後、ユネスコのMILID大学ネットワークに法政大学を加盟させるべく、努力を傾け、2014年に加盟が実現するとともに、ユネスコ関係者を招いた国際シンポジウムを開催した。

また、東日本大震災以降、坂本ゼミは被害を受けた宮城・福島に支援活動を行い始める。2015年には、坂本と笹川孝一教授、寺崎里水準教授の3名を中心に、文科省ユネスコ国内委員会助成金を得て、「福島ESD(持続可能な開発のための教育)コンソーシアム」を設立し、福島のユネスコスクールを支援するプロジェクトを開始した。その後、キャリアデザイン学部の助成金を得て活動を続けた。また、地域学習支援実習の1グループとして、福島・宮城での学校支援活動を継続することになる。こちらも佐藤一子教授の提案であった。ちなみに、ESDもMILIDと同様に、ユネスコのプログラムであり、学習指導要領の土台に位置している。

こうして、ユネスコとの連携は現在もキャリアデザイン学部のメディアリテラシー関連の授業や地域学習支援実習、そして2025年度の新カリキュラムに設置される新科目「ESD実習」へとつながっている。現在、図書館司書課程は法政大学におけるユネスコのMILID担当部局となっており、ユネスコ本部との直接的なつながりを持っている。学部設立時にはなかったユネスコとの連携がようやく具体的な形になりつつあるといえるだろう。

改めてキャリアデザイン学部創設時を思い起こそう。世界は「911」直後の異様な雰囲気満ちていた。ちょうどITバブル崩壊直後であり、「911」は世界的不況を加速化させた。そんな状況下で、学部創設時は学部の方向性をめぐって多くの議論があった。日本で初めてのキャリアをテーマとした学部であり、さまざまな学問的背景を持つ教員が集っていた。

そして、2008年にはリーマン・ショックが世界を襲う。私たちにとても無縁ではなかった。当時の学生は就職に必死だった。ゼミ生に頼まれて、何度も面接の練習をしたことを覚えている。そして、今日もお世界には、ロシアによるウ

クライナ侵略やガザの危機がある。ネット上には偽情報や戦争プロパガンダに溢れ、若者たちを不安に陥れている。キャリアデザイン学部は、危機と不安の中に誕生し、若者たちが自らの人生を切り開く学びを作ろうと努力を重ねてきた。それはグローバルな視点があってこそ可能となる。実際、坂本ゼミには海外に仕事を求めたり、海外で会社を興したりした卒業生がいる。キャリアデザイン学部は創設以来、体験を重視してきた。困難な課題に直面した体験は「実践知」を育む。個人の困難を個人の中だけにとどめず、世界が共有する困難へと昇華させ、その困難に立ち向かう必要がある。

キャリアデザイン学部は2025年から新カリキュラムに移行するが、グローバルな視点を忘れることなく、学問としても、教育としても新たな「キャリアステイーズ」を作っていくことが求められているのではないだろうか。

## キャリアデザイン学部との出会い

武石 恵美子

私のキャリアを振り返ってみると、大学を卒業して労働省（現在の厚生労働省）に入省し、ハローワークや男女雇用機会均等法に関する業務に携わり、約10年勤務したところで民間のシンクタンクに転職、そこで社会人大学院生として学位を取得しながら10年強勤務したのち、法政大学のキャリアデザイン学部で教鞭をとり、現在に至っている。役人、シンクタンク研究員、大学教員とそれぞれタイプの違う仕事をしてきたが、本学での仕事が一番長くなった。大卒女性の就職が難しい時期に国家公務員として働き続ける覚悟で仕事を始めたが、その時々で自分の将来に思いを巡らしながらキャリアを歩んできた。こうして考えると、学生時代には全く予期しないキャリアだったと感慨深いものがある。偶然の、しかも良質な出会いによって、現在に至っていることに感謝している。

私と本学部との関わりは、大学院で始まった。2003年に創設された本学部は、2005年から大学院を開設した。大学院一期生が入学するタイミングで大学院の非常勤講師を務めたのが、私と本学部・研究科との最初の出会いである。大学院で

担当した科目は「ライフデザイン論」。「キャリアデザイン」と同じくらいにとらえどころのない名称の科目の担当を任され、最初は戸惑いがあったものの、その分内容の自由度も大きいと前向きにとらえて、私の専門の仕事と家庭の両立のテーマを中心に学生と論文を講読し、ディスカッションをすることで授業を展開した。

大学院一期生は、「キャリアデザイン学」という新しい研究科の今日的な存在意義に共感し、キャリアデザイン学の今後に期待を抱いて集まった学生だったということもあり、お互いに様々な問題意識を提起しながら深いディスカッションをしたことを楽しく思い出す。私の専門の女性のキャリアという視点から当時を振り返ると、女性の就業率が高まっていく中でワーク・ライフ・バランスの議論が活発化し、日本人の働き方が社会的に大きな問題になってきた時期である。ワークキャリアだけでなくライフキャリアを含めてキャリアの概念が拡大していった時期に、社会人の学生と広い視点で「キャリア」の現状や課題について議論をできたのは、得難い経験であった。

学部の教員として正式に着任したのが翌2006年である。大学で働いたことがない私にとって、大学組織は非常に「不思議な」組織だった。特に法政大学は、学部の自主性を重んじ、教員の自立性が高いという特徴がある。組織としての意思決定も民間企業や公務の組織とは全く異なり、コンセンサスを重視し、トップダウンで強引に進めることはしない。したがって教授会では自由な意見が交わされる。特に学部の完成年度（で私が着任した）の2006年度は、学部の教育や研究をいったん振り返って総括をした上で、今後を展望して新たに方向性を考える時期だったのだと思う。

私が着任直後の4月初めには、合宿形式で教授会が開催され、この合宿への参加が私の法政大学での初仕事だった。大学で働いた経験がない私は、そんなものなのか、と思って参加したが、今になって思えばかなりイレギュラーな形での教授会の開催形式であった。合宿では、長時間にわたり、「キャリアデザイン学」や今後の学部のあり方について様々な意見が交わされ、その熱量に圧倒された。教授会は、「キャリアデザイン学」という新たな学問領域を設定して教育・研究活動を展開しようというチャレンジ精神あふれるメンバーが多く、特に本学部の学際性という特徴から議論はなかなか収斂しない。専門性や教員の個性の面で、まさ

に「多様性」に富む組織の力を結集して、新しい学部を軌道に乗せるという難局に向かい合っていたのだと思う。

合宿教授会の直後には、新入生の合宿オリエンテーションがあった。1年生約300名を教員全員が引率し、2泊3日で様々な活動をした。キャリアに関連する外部講師の講演会、教員が提供するプログラムに自由に参加するグループワークなどの学びに加えて、上級生のサポーターが新入生のための企画を準備してくれ、新入生にとっては得難い経験となっていたようだ。私自身も新入生と同様に学部で馴染んでいく時期であり、学生たちが準備してくれた様々な企画に参加しながら、学部の雰囲気を知る機会となった。

このように、法政大学への着任直後の2つの「合宿」への参加により、かなり濃密に学部の雰囲気を感じ取ることができた。

大学院と同様に学部においても、新しい学部創設に期待して入学した学生が多く、エネルギーで活動的という特徴を持つ学生達だった。新入生合宿ですぐに友人関係も構築できるというメリットもあり、もともと元気な学生も多いため、とにかく授業中の私語が多い。1年生のほとんどが受講する入門の授業を担当した時には、授業中に何度も私語についての注意をしていたのも、今は懐かしい思い出である。市ヶ谷のオープンキャンパスのスタッフもキャリアデザイン学部の学生が多く、市ヶ谷キャンパスの中では小規模学部であるにもかかわらず、スタッフの半分くらいが本学部生で、リーダーも務める学生が多いというように、学部への所属意識が高く教職員と一緒に学部を盛り上げていきたいという意識が強い学生が多かった。

学部創設から20年が経過し、学部を取り巻く状況も随分変わってきたように思う。

学部創設時は、「キャリア」や「キャリアデザイン」という言葉が一般的ではなかったので、「デザイン」ということで美術系の学部だと勘違いする人もいたという話をきく。しかし現在、「キャリア」についての社会の関心がこれまでに高く高まってきたことを、私の専門の人的資源管理の分野でも痛感する。直近では「人的資本経営」が注目され、「人的資本」に社会や企業が投資をすることの重要性が強く認識されるようになってきている。人的資本の真ん中にある「個人」の価値をどう高めることができるか、ということを考えようとすれば、個人の「キャリア」

に正面から向き合うことになる。本学部や本研究科で学んだ学生たちが、「キャリア」を重視するこれからの社会に様々な形で関わり貢献していくことができるよう、そして偶然の出会いを自身のキャリアに活かしていけるよう、私の役割として次世代のためにできることは何かを考えていきたいと思う。

## 本学部への着任とその後を振り返って

中野 貴之

### 1. 着任の決定

本学部への着任が決まったのは、2002年のことである。

私は1998年に流通経済大学経済学部にて「財務会計論」担当の専任講師として着任し、2001年に助教授に昇進したが、2002年1月17日（木）の夜8時頃に拙宅に1本の電話があった。当時の記録を確認すると、その日は午後教授会に出席し、夕方に帰宅したようである。まだ子供たちが3歳、4ヶ月と幼く、その日は私が二人をお風呂に入れ、一息ついたときにその電話があった。

電話の主は、母校・法政大学経営学部のある先生で、その先生とはこのときはじめにお話したこともあり、緊張しつつお話をうかがった。その内容は、「2003年4月に法政にキャリアデザイン学部という新学部が創設されるのですが、2005年に着任して欲しい。については届出書類に名前を含めたい。ぜひとも法政にいらしてください。」という驚くべきものであった。突然の打診に大いに戸惑いを覚えるとともに、「キャリアデザイン学部」という名称も唐突感があり、話を飲み込むのに少々時間（10数秒程度）を要したことを覚えている。ただ、30代前半の十分な実績もない私に白羽の矢を立てて下さったことはこの上なく嬉しく、また「キャリアデザイン学部」という新規性に富んだ場に自らを置くことも面白そうだと直感し、その場で快くお引き受けすることにしたのである。

こうして本学部に着任することが決まったのだが、まだ3年後ということもあり、しばらく実感は湧かなかった。前任校では入試業務をはじめ重要な役割を果たすようになり、同僚の先生方も若い私に大いに期待して下さっていたが、最後

は私を快く送り出して下さり、今も感謝の気持ちで一杯だ。とくに、学長として約30年に渡って同大学を率いてきておられた佐伯弘治先生（当時は学園長）は、「清成総長からキャリアデザイン学部の教員名簿に貴大学の人が含まれているが、いいのか？」と数年前に尋ねられたことがあり、「もちろん構わないですよ」と応じたと話された上で、「それは、あなただったんだね」と優しく言葉をかけていただいたことは忘れられない。佐伯先生は法政の校友としても有名であったが、人並外れた弁舌力と、肩幅の広い立派な体躯に恵まれた実に度量の大きな方であった。2016年に鬼籍に入られているが、往時を思い起こしこの場を借りして感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈りしたい。

## 2. 着任後の教育、学部運営

2005年4月に本学部に着任して何よりも嬉しかったことは、それまでに出会ったことがない、良い意味で「規格外」ともいうべき学生が多くいたことである。「キャリアデザイン学部」という名称が必ずしも十分に認知されていない状況下、進んで志望した学生たちだけに全般的にフロンティア精神に溢れ、能動的に行動する学生が多くを占めていたように思う。「規格外」の学生への対応に手を焼くことはあっても、今となってはすべてが楽しい思い出だ。新入生合宿、基礎ゼミ、学生研究発表会・学部表彰など、学生と教員とが一体となって活動する機会が多く、先生方は一様に熱心で、学部全体が熱気に溢れていた。

また一学年に10名以上の社会人学生（主に30代～40代）が在籍し、主として夜間の授業に出席していたが、貴重な時間を捻出して通学しているだけに授業での真剣度が違い、その姿勢が授業全体の空気を引き締め、若い学生にも良い刺激を与えていた。社会人学生も若い学生から刺激を受け、相乗効果が発現していたといえよう。もとより教える側もとても遣り甲斐があった。

こうして創設期は学部全体が熱気に溢れていたことはたしかであるが、当初のカリキュラムは、「教育」、「ビジネス」および「文化」に属する科目群が横一線に並列している感が強く、体系的な学びが困難であるとの指摘が教授会メンバーの中に根強くあった。ただし教職員の専攻分野、経歴等はそれぞれ多岐に渡っていたがゆえに、カリキュラムに対する考え方も多様であり、時に激しい議論が交わされるものの、一致点を見出せない状態が続いていた。

高野良一学部長はこのカリキュラム改革という難題に挑み、このとき私は教授会副主任として執行部の一端を担うことになった。教授会主任は、流通論やマーケティング論が専門の外川洋子先生であった。

高野先生のリーダーシップの下、中堅・若手教員を中心に、カリキュラム改革の議論は一気に進み、「発達・教育キャリア」、「ビジネスキャリア」および「ライフキャリア」という、現行のカリキュラムの体系が確立されたわけである。私は本学部に着任して5年弱が経過したところであったが、カリキュラム改革について当事者意識をもって先生方と深く議論し一定の成果を得たことで、この学部への愛着を一層強く覚えるようになった。

ただ、カリキュラム改革の後、外川先生のご体調が思わしくなくなり、若くして逝去されことは痛恨の極みであった。外川先生は2004年に本学部に着任され、学部創設期の運営・教育に尽力された功労者のお一人である。ここに外川先生を偲び、改めて心よりご冥福をお祈りしたい。

### 3. 研究活動

上述のとおり私は2005年に本学部に着任しているのだが、振り返ってみると、私個人の「研究者としての危機」ともいうべき時期と重なっていた。

私は会計学の領域のうち、財務会計・財務報告およびディスクロージャーという分野を専門としている。米国の会計学研究は、1970年代以降、適切な規範の形成を探求する「制度研究」から、統計的手法に基づく「実証研究」へとメインストリームが移行したが、わが国においては2000年代前半に至ってもなお制度研究が学界の主流をなしていた。主に1990年代に私が受けた教育もまた「制度研究」であった。しかし会計の規範たる会計基準が国ごとに異なるという時代は終焉を迎えつつあり、むしろグローバルな統一的会計基準の下、各法域・地域においていかなる現象が観察されるか、またいかなる経済的帰結をもたらすか等に関する頑健な科学的証拠を、研究者が提示し政策決定に貢献する、という新たな時代を迎えようとしていた。本学部への移籍当初、私は統計的手法に基づく実証研究を手掛けたことがなかったが、わが国においても実証研究がメインストリームの位置を占めるという意味でのパラダイム変革が起きることは必至な情勢にあり、私個人のパラダイム変革も急務であった。そして、その変革は容易ならざることの

ように感じていた。

本学部に着任してみると、先生方の多くは数量的ないしは定性的な実証分析を研究手法としてごく普通に使用しており、それらの研究手法を修得しようとしている者にとっては打ってつけの道場であった。教員間の交流も親密で、気楽に研究のことを議論したり、さらには共同研究の機会を提供してもらったりしたことは有意義であった。私の専攻分野では、米国の会計学研究と同様に、今や実証研究がメインストリームの一つを形成するに至っており、その潮流の中で私もなんとか実証的な手法を用いつつ研究活動を継続することができているのは本学部に職を得たお陰だろうと思うことが多い。改めて本学部の先生方に感謝したい。

#### 4. 学部創設 20 年を迎えて

2023 年度が終了すると、私が着任して以来、19 年の年月が経過したことになる。あっという間だったような気もするが、一方で、今般、学部創設期の頃を回想する機会を得てみると、遠い昔の出来事のような感慨も覚える。

教授会において周囲を見回してみると、創設時のメンバーはほとんど残っておらず、往時を知る先生方はごく少数である。本学部では、その後、着任された先生方が大いに活躍され、現在、2000 年代後半以来のカリキュラム改革が進められている最中にある。学部創設 20 年を迎え、本学部が、新たなカリキュラムの下、一層発展していくことを願うばかりである。